

タンポポハウス・志楽小学校

「ちからをあわせてすてきな
リースをつくろう」

※公開保育・授業の様子の写真掲載箇所

平成24年12月7日(金)志楽小学校において、タンポポハウス年長児と志楽小学校1年生との保小連携事業の公開保育・授業を実施し、保育所・幼稚園・小学校の関係者35人が参加しました。

10:50-11:35 公開保育・授業「リースづくり」

11:50-12:30 講評・意見交換会

説明：志楽小学校 教諭 西村 綾 氏
タンポポハウス 保育士 水上 ひとみ 氏
講師：鳴門教育大学大学院 教授 木下 光二 氏

リースづくり

「しゅっぱ〜つ！」子どもたちの元気な声が体育館に響きました。

タンポポハウスの年長児19人と志楽小学校1年1組34人が、公開保育・授業を前に体育館でゲームをして心も体も温まったところで、学校探検に出発です。

校長室や職員室、図書室などを探検してまわった後、公開保育・授業が行われる1年1組の教室に集合。さあ、リースづくりの始まりです。

保小連携事業を進める事務局から志楽小学校に「公開」をお願いしたのが10月、そんな急なお願いにも関わらず、2か月でこの日を迎えるに至りました。

単なるイベントではなく連携活動の保育・授業とするために、先生と保育士とが話し合い、この短い間に、1年生がタンポポハウスを訪れて一緒に

遊び、また別の日にはお互いが近くの神社に集まってリースの材料を集めるなどの「なかよしさんぽ」を実施。新1年生の就学時健診も利用して、1年生からの手紙を年長児に渡しました。

そうして迎えた公開保育・授業。

なかよしさんぽで一緒に見た自然物を題材にした1年生のクイズに保育園の子も積極的に手をあげ答えます。

校長先生も植物を手にとりクイズに参加。実は栄養士さんや他の先生もリースの材料集めなど学校全体で協力されていたそうです。

さて教室では、リースの元となるあさがおのつるが置いてあり、その中から保育園の子がお気に入りを選びます。

教室には、材料がなくなった時の救世主「お店屋さん」もあります。

リボン屋さんでは、どの色にするか、どれくらいの長さにするか、お客さんである年長児と1年生

が決めて、1年生のお店やさんに伝え、ほしい長さに切ってもらいます。

「きいろ?」「あか?」とリースを手にした年長児に飾りの色を聞く1年生。

年長児がリースにリボンを巻きつけ、最後のくくりをする1年生。

逆に1年生がまくリボンの端を持ってお手伝いする年長児。

1年生が巻いたリボンを年長児が切る。

木の実のお店やさんで「枝つき?」「実だけ?」と思わぬ質問に本気で悩む年長児と1年生。一生懸命相談しています。

当日は、見学者も多く、大人の陰に隠れてしまったお店やさん。でも大きな声で「いらっやいませー。」と呼びかけ始めます。

後半には、売り歩き始めるお店やさん。子どもたちが考えた工夫です。

志楽小学校 先生インタビューから

1年生が2クラスで66人に対し、年長児19人という人数の差を解消するため、2組は年中児と活動を共にするなど、短い期間の中でいろいろと工夫されました。後日、活動を代表して志楽小学校の1年生1組・2組の担任の先生と校長先生に感想等をお伺いしました。

◎特に外の活動が多いため、天候に左右されやすく、余裕が欲しい。もっと時間があるとよい。

◎保育園と小学校の予定のすり合わせが必要だが、話し合いを通して、お互いを知ることができる。それまでは保育園の1日の流れやどんな行事があるかなど知らなかった。

◎連携活動後、2学期最後の日に大掃除をしていて、「きれいにしないと正月の神様が来ない」という話をしていたら、子どもたちから「来ないと

困る。」という意見が出て、自分達のところに来ないのが困るのかと思ったら、「来年の1年生が困る。」ということだった。自然に次の一年生になる子への思いが育まれている。

◎保育園から子どもの心をほぐす方法を教えてもらった。子どもへの接し方、活かし方を考えるようになった。

◎保と小でねらいが少し違うが、ねらいを大きく捉えることで生活科が保小連携に有効。

◎保育園の子が小学校の子と活動したことを家でも話題にするようで保護者からそんなこともしてくれるんですねと言われた。保護者も子を通して小学校入学の安心感が得られている。

◎2組はリースの代わりに大きな松ぼっくりに飾りをつけクリスマスツリーにして保育園の子にあげた。材料を取りに行くときなどに安全面で協力してくれるダイヤモンド協議会の方にも渡した

ら、お礼の手紙をいただくなど、保小だけでなく地域の連携が取れた。活動が広がってきた。

◎時間がかかるけれども、子どものために、子どもの学び・育ちのために大事ですよ。ということを理解しないと連携ありきになってしまう。子どもにとって意味のあるものに。

◎子どもが楽しんだからこそ、学んだからこそ「連携」ができる。

◎小学校に来るのは保育園だけではないので、保幼小と連携できることが望ましい。

◎保幼の経験がムダにならないようにお互いを知ることで成長をつなげることが出来る。

◎小主導だったので、保育園はどうだったかなと心配。慣れたところに終わってしまつて残念。

◎保小連携活動により「学校がたのしい」という気持ちが残る。自然に1年生への思いが出てくる。

意見交換会

授業説明 志楽小学校 西村先生から

- ◎貴重な経験となった。連携の第1歩として、短い準備期間の中で「心を通わせるために何が必要か」に視点をおいてすすめてきた。今回が7回目の交流。子どもが小学校に楽しい思いで来られるように、を考えた。
- ◎今の1年生が就学時健診を振り返り、自分達が不安だったことから、新1年生を励まそうと手紙を書くことを決め、検診のお手伝いをする5年生に渡してもらおうとお願いし、ポストづくりをするなど自発的なスタートになった。
- ◎リースのもとになったあさがおのつるは、あさがおプロジェクトとして、子ども達が育てたあさがおを使って、色水、しおりづくりなど様々な取り組みをしたあと、つるのみになったのを見てリースにしようと思った。
- ◎博士のメモ帳は、要点のみ伝え、子ども達がつくった。
- ◎さみしくなった鉢にチューリップの球根を植え、「入学式には咲いてね」とお願いするかわいい姿もみられた。

- ◎鈴鹿神社での木の実拾いは、探す手がかりとして「あきのピングカード」をつくった。「たくさん拾ったけど、ぼくのたからものはペアの〇〇くんです。」という声も聞かれた。
- ◎リースのリボン巻き、1回目は「先生して」と言っていたが、今回は誰かのために…と思うことで、優しい接し方や考えが深められた。

この1カ月集中して取り組んでみて

・課題だと思ったこと

- ◎志楽小 西村先生
自分が話しすぎたり、アドバイスしすぎた。時間がせまるとあせりがあった。子どもの興味に寄り添えていなかったと思った。
- ◎タンポポハウス 水上保育士
探検からリースづくりへ、すぐに切り替えができず、取りかかりに時間がかかった。もっとゆったりとした中で、声かけをできればよかった。



・学んだこと

- ◎志楽小 西村先生
昨年度は6年生担任で「小→中をどうつなげるか」の視点だったが、今年度は保→小となり、がらりと視点が変わった。連携の中でこれまで経験のなかったことを学んだ。
- ◎タンポポハウス 水上保育士
保育園では生活が主。年長児は保育園では一番大きい1年生のお兄さんお姉さんと関わる中で、甘える姿が見られた。テンションが上がり、いつもは見られない姿があった。

はじめての活動としては120点 ~ 次のステップに向けて ~

保小連携事業の講師である国立大学法人鳴門教育大学大学院 木下 光二 教授からは、「はじめての活動としては120点」との講評がありました。

そして、はじめての活動に挑んだからこそ、期待される次へのステップが示されました。

これまでの保育や教育の現場では、どうしてもやりすぎてしまうことが多いのですが、それを主体的な活動に変えていくための提案です。

- ◎学校探検では、教室に説明のカードが貼ってあるため、子どもが読むだけになってしまう。何もなければ子どもがたどたどしいながらも自分の言葉で説明するため、会話が期待できる。
- ◎今回のリースのものはつくってあったが、つくるところからするともっと良い。両者にとって一緒につくることが大切。それを朝の時間にしても良かった。
- ◎準備しすぎず、既存のものをいかし、両者が夢中になれる活動になることが大切。

- ◎連携は、上の子どもが下の子どもをお世話することではなく、互恵性があることで、両者が学び合うことである。
- ◎子どもにとって今日の活動は良かった。2回目3回目と子どものための連携を続けてほしい。

意見交換会参加者意見より

- ◎子どもが楽しんでた。時間があれば、じっくりかわれたのでは？
1年生が全てするのではなく「何つけたい？」と尋ねていた。3回位の関わりの中で、1年生が保育園の子に上手に関わることで、良い経験になっていると思った。
- ◎計画がきちんと立てられていた。本時に向けての事前準備がすごいと思った。子ども達が今日に向け、活動を楽しみに「ああしたい、こうしたい」と思える内容だった。今日初めて

学校に来たということであれば、1回でこれだけの活動は盛りだくさんだったのではないかな。お店やさんは、はりきって呼びかけもしていたのに、こたえる子が少なくもったいなく感じた。声をかけている子もいたが、保の子が見てるだけのお客さんになっているところがあったかもしれない。1年生は「教えるんだ」という思いがあり、あったかい雰囲気それまでの活動がいきていると思った。

- ◎連携をやってきて、どう子どもを主役にするか「先生が主→子どもが主へ」と授業が変わった。連携でお得感を味わっている。
5歳と1年生について、視点として夢中になったか、自己発揮できたか、互いに話し合い検証することが大事。どちらかが主役になりお得感があるもの、もっとやりたいと思う授業であること。1か月でこれだけのことをやったのは、すばらしい。

一歩を踏み出す大切さ ~参加者の感想から~

公開保育・授業について

- ◎大勢が見守る中、小学生、年長の子も達が、楽しそうにリースづくりをしていたと思います。今までの準備や成果が今回の交流にたくさんいきていたと思いました。
- ◎私が観察していたグループでは、小学生が保育園児に松ぼっくり屋さんであること、買いに来てほしいことを伝えたり、保育園の子の行動を見守り、やさしくサポートしている姿もあり、ほほえましかったです。
- ◎短い期間に細かくしつかりと計画されていたと思います。確かに1年生がやってしまった部分もあったかもしれませんが、必ずそこには、やさしい言葉かけがありました。「〇〇ちゃん、そんなやさしいことが言えるようになったんやね！」と卒園児の担任？の先生が言っておられるのを聞き、ほほえましく思いました。

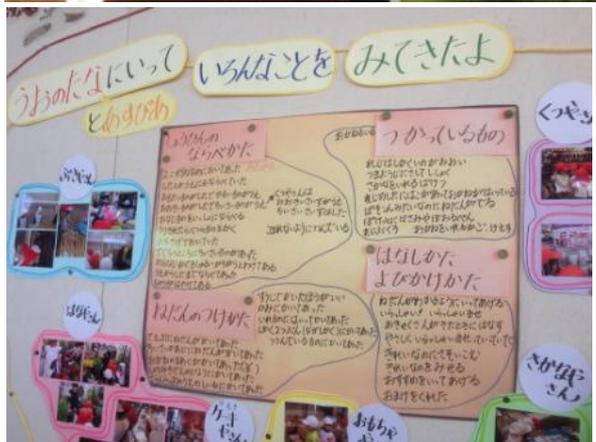
- ◎まだ保育園の子たちが一緒になって共にする…という姿ではなかったけれど、小学校の子がするのを見て、まねて、しようとする姿が見られたり、小学校の子が教えてあげようとする姿が見られた。回を重ねることで、もっとつながりが深められ一緒に楽しむ姿が多くなるのでは…と思いました。
- ◎子ども達も楽しんで授業を受けていて、よい経験だなあと思いました。普段とは違う子ども達の様子が見られました。あまり見ることのできない小学校の生活の様子が見られてうれしかったです。
- ◎本当に忙しい中で、本当にご苦労様でした。1年生の子ども達が、がんばって教えるようしている姿、とてもほほえましかったです。一歩を踏み出すことの大切さを学びました。ありがとうございました。

講評及び意見交換会について

◎保小連携を継続しておられる園や学校の先生方の意見を聞けて、とても勉強になりました。(良かった点だけでなく課題も出せるのはとても勉強になります。)子どもが主体の生活をしようという事は、普段の保育の中でも大切にしていきたいと考えていることですし、そのことも聞けて、とても嬉しかったです。

特にその中でも、自分自身の反省として“やりすぎ!!”ないこと。いつも何かひっかかっているのはこれだ!!と発見しました。ありがとうございました。準備しすぎずと学びが少ない…これは、公私共に私の課題だと思いました。いい(良い)加減って本当にむずかしいです。

◎連携が始まって間もないということを知り、その中でこれだけの活動ができたのはすごいな…と思います。リース作りでリボンを巻く練習をして今日のにぞんだ子の話を聞き、私の見ていた子のことかと思いついて誰のために…と頑張る気持ち、とてもすてきだと思います。共に主役になれるように今後さらに連携を深めていってください。



平成22～24年度 文部科学省研究開発学校指定(第3年次)
幼小をつなぐ幼児期のカリキュラム『神戸大学附属幼稚園プラン』の創造
～10の方向・40の道筋で幼児教育を可視化する～

8:00-11:00 公開保育/保育記録上映・展示
11:00-12:15 研究発表会(発表:神戸大学附属幼稚園 田中 孝尚 研究主任)
13:15-14:45 シンポジウム「幼児期の教育と小学校教育の接続を考える」
コーディネーター:神長 美津子 氏(東京成徳大学教授)
シンポジスト:湯川秀樹氏(文科省初等中等教育局幼児教育課幼児教育調査官)
無藤 隆 氏(白梅学園大学子ども学部教授)
伊藤 篤 氏(神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授)
15:00-16:30 講演会「学びの芽生えから自覚的な学びへ」 無藤 隆 氏

平成24年12月8日(土)神戸大学附属幼稚園(明石市)で研究発表会が開催されました。本市保小連携の講師である鳴門教育大学大学院木下光二教授から教えていただき、保小連携事業モデル園の研修として参加しました。

お忙しい中でしたが31人の参加があり、バスで現地へと向かいました。舞鶴から明石市へと向かうバスの中では、鳴門教育大学附属幼稚園の様子をDVDで木下教授の解説付きで見せていただきました。多くの保育関係者が一緒に研修会へと向かう姿に、木下教授も驚かれ、思わず写真をパチリと撮影される姿もありました。

研究発表会には400人以上が参加され大盛況でした。大勢の参観者がいる中でも子どもたちは恥ずかしがることもなく、思い思いの遊びをしていました。シンポジウムでは、木下教授も委員である「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」の報告(平成22年11月11日)について触れられることが多かったので、改めて以下に同報告の概要(抜粋)をご紹介します。

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(概要・抜粋)

幼小接続の課題

- ◎ほとんどの地方公共団体で幼小接続の重要性を認識(市町村99%)
- ◎その一方、幼小接続の取組は十分実施されているとはいえない状況(市町村80%)

報告のポイント

① 幼児期の教育と小学校教育の関係を「連続性・一貫性」で捉える考え方を示す。

◎幼児期の教育と小学校教育では、互いの教育を理解し、見通すことが必要。(それぞれ発達の違いを踏まえて教育を充実させることが重要であり、一方が他方に合わせるものではないことに留意。)

② 幼児期と児童期の教育活動をつながりで捉える工夫を示す。

◎学びの芽生えの時期(幼児期)、自覚的な学びの時期(児童期)という発達の段階の違いからくる、遊びの中での学びと各教科等の授業を通じた学習という違いがあるものの、「人とのかかわり」や「ものとのかかわり」という直接的・具体的な

対象とのかかわりで幼児期と児童期の教育活動のつながりを見通して円滑な移行を図ることが必要。

◎幼児期と児童期の教育双方が接続を意識する期間を「接続期」というつながりとして捉える考え方の普及を図る。(幼児期の年長から児童期(低学年)の期間における子どもの発達や学びの連続性を踏まえて接続期を捉えることが必要。)

③ 幼小接続の取組を進めるための方策(連携・接続の体制づくり等)を示す。

◎幼小接続のための連携・接続の体制づくり、教職員の資質向上(研修体制の確立)、家庭や地域社会との連携・協力についてのポイントを示す。

※報告書における「幼小接続」については、幼稚園と小学校という学校同士の接続はもとより、保育所、認定こども園といった幼児期の教育を担う施設で行われる教育と小学校教育との接続も考慮した上で用いている。

報告概要

1. 幼小接続の体系

(幼小接続の体系的理解)

◎幼少の教育を「教育の目的・目標」→「教育課程」→「教育活動」で展開する「3段構造」で捉えることが必要。

(教育の目的・目標)

◎幼少の教育の目的・目標(知・徳・体)は連続性・一貫性をもって構成されている。
◎幼児期の教育と児童期の教育の目標を「学びの基礎力の育成」という一つのつながりとして捉えることが必要。

(教育課程)

◎発達の段階に配慮した違いが存在するものの、こうした違いの理解・実践は、あくまで両者の目的・目標が連続性・一貫性をもって構成されているとの前提に立って行われなければならない。

(教育活動)

◎学びの芽生えの時期(幼児期)と自覚的な学びの時期(児童期)という発達の段階の

違いからくる、遊びの中での学びと各教科等の授業を通じた学習との違いがあるものの、「人とかかわり」や「ものとかかわり」という直接的・具体的な対象とかかわりで幼児期と児童期の教育活動のつながりを見通して、幼児期から児童期の教育への円滑な移行を図ることが必要。

（幼児期から児童期にかけて求められる教育）

◎幼児期の教育：今の学びがどのように育っていくのかを見通した教育課程の編成・実施が求められる。

◎児童期の教育：今の学習がどのように育ってきたのかを見通した教育課程の編成・実施が求められる。

◎幼児期の教育と児童期の教育は、それぞれ発達の段階を踏まえて教育を充実させることが重要であり、一方が他方に合わせるものではないことに留意することが必要。

2. 幼小接続における教育課程編成・指導計画作成上の留意点

（教育課程編成上の留意点）

◎幼児期から児童期

学びの基礎力の育成を図るため、「三つの自立」（学び・生活上・精神的な）を養うこと

◎児童期以降の教育

「学力の三つの要素」（基礎的な知識・技能、課題解決のために必要な思考力・判断力・表現力等、主体的に取り組む態度）

◎幼児期の終わり

「三つの自立」を養うことが求められる。

◎児童期（低学年）

「三つの自立」を養うことを含め、教育活動全体を通じて「学力の三つの要素」を培うことが求められる。

◎いわゆる「小1プロブレム」などの課題は、幼児期の教育の責のみに帰することも、児童期の教育の責のみに帰することもできず、両者が課題を共有し、共に手を携えて解決のための取組を進めていかなければならない。

（指導計画作成上の留意点）

①「人とかかわり」における留意点

< 幼児期の終わり >

◎幼児の興味・関心や生活、協同性の育ち等の状況を踏まえて教職員が方向づけた課題を自分のこととして受け止め、相談したり互いの考えに折り合いをつけたりしながら、クラスやグループみんなで達成感をもってやり遂げる活動を計画的に進めることが必要。

< 児童期（低学年） >

◎幼児期における「人とかかわり」の指導の状況や実際の子どもの発達や学びの状況を十分把握しつつ、学校教育活動全体を通じ、与えられた課題について友達と助け合いながら、自分が果たすべき役割（学習や仕事）をしっかり果たすといった集団規範性の形成を図る活動を計画的に進めることが必要。その際、幼児期の教育の方法を取り入れていくことも考えられる。

②「ものとかかわり」における留意点

< 幼児期の終わり >

◎幼児の興味・関心や生活等の状況を踏まえて教職員が方向づけた課題について、発達の個人差に十分配慮しつつ、これまでの生活や体験の中で感得した法則性、言葉や文字、数量的な関係などを組み合わせて課題を解決したり、場面に応じて適切に使ったりすることについて、クラスやグループみんなで経験出来る活動を計画的に進めることが必要。

< 児童期（低学年） >

◎幼児期における「ものとかかわり」の指導の状況や実際の子どもの発達や学びの状況を十分把握しつつ、各教科等の指導を通じ、日常生活に必要な基礎的な国語の能力、生活に必要な数量的な関係の正しい理解や基礎的な処理能力、生活にかかわる自然事象についての実感的な理解と基礎的な能力、音や音楽のよさや面白さを感じ取りながら表現、鑑賞する能力、身近な自然物や人工の材料の形や色などから発想や構想の能力などの育成を図るための活動を計画的に進めることが必要。その際、幼児期の教育の方法を取り入れていくことも考えられる。

③人やものとかかわりと言葉や表現の関係

◎人やものとかかわりを支えるために重要な役割を担うのが言葉や表現である。これらを通じて他の子どもや教職員・保護者とのやりとりを行うことで気付きや思考を深めようとする活動が展開されるよう、留意することが必要。

④スタートカリキュラムの編成における留意点

◎小学校入学時に、幼児期の教育との接続を意識したスタートカリキュラムが各小学校において進められており、今後ともその取組を進めていくことが必要。

スタートカリキュラム編成の主な留意点

- ・幼稚園、保育所、認定こども園と連携協力すること
- ・個々の児童に対応した取組であること
- ・学校全体での取組とすること
- ・保護者への適切な説明を行うこと
- ・授業時間や学習空間などの環境構成、人間関係づくりなどについて工夫すること

3. 幼小接続の取組を進めるための方策

（連携・接続の体制づくり）

◎幼小接続の取組は、教職員の交流などの人的な連携から始まり、次第に両者が抱える教育上の課題を共有し、やがて幼児期から児童期への教育のつながりを確保する教育課程の編成・実施へと発展していく。その際、都道府県・市町村には、教育委員会を中心として関係部局が連携し、各学校・施設へ積極的な支援を行うなどのリーダーシップが求められる。

◎幼小接続のための連携・接続の関係を明らかにして各学校・施設が共有し、後戻りしない取組を進めていくことが必要。その際、都道府県や市町村の教育委員会等があらかじめ連携・接続に関する基本方針や支援方を策定し、各学校・施設はそれらを踏まえて連携や接続の取組を進めることが望ましい。

（連携から接続へと発展する過程の目安）

- ・ステップ0 連携の予定・計画がまだ無い
- ・ステップ1 連携・接続に着手したいが、まだ検討中である
- ・ステップ2 年数回の授業、行事、研究会などがあるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない
- ・ステップ3 授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている
- ・ステップ4 接続を見通して編成・実施された教育課程について、実践結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討している

（教職員の資質向上）

◎幼小接続に関し教職員に求められる資質・幼児期と児童期の教育課程・指導方法等の違い、子どもの発達や学びの現状等を正しく理解する力
・幼児期の教育を担当する教職員は児童期の教育を見通す力
・児童期の教育を担当する教職員は幼児期の教育を見通す力
・上記を踏まえ、今の教育活動を構成・実践する力
・他の教職員や保護者と連携・接続のために必要な関係を構築する力
があり、こうした資質の向上を図るべく、各学校・施設研修や行政主催研修といった研修体制を確立することが必要。

（幼児期と児童期をつながりとして捉える工夫（接続期））

◎幼児期と児童期の教育双方が接続を意識する期間を「接続期」というつながりとして捉える考え方を普及することが必要。
◎単なる準備期間や馴れの期間と捉えるべきではなく、幼児期の年長から児童期（低学年）の期間における子どもの発達や学びの連続性を踏まえて捉えることが必要。
◎接続期の始期・終期については、各学校・施設において、適切な期間を設定して幼小接続の実践を工夫していくことが必要。

（家庭や地域社会との連携・協力）

◎家庭や地域社会との連携・協力が重要であり、共に子どもを育てていくという視点に立って、家庭や地域社会との連携を深め、子どもの生活の充実と活性化を図ることが大切である。

（幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議、2011）

舞鶴の保小連携の取組が雑誌で紹介されます。

「初等教育資料」（文部科学省教育課程課/幼児教育課）12月号
特集「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の実際」において、木下教授の論説の中で、舞鶴市の連携について紹介されています。

POT（チャイルド本社）2013別冊付録「保育カリキュラム」
4月号～ 保小連携のページで八雲保育園と由良川小学校の年間計画や実践事例が掲載されます。